

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポルトガル語におけるRaisingについて
Author(s)	坂東, 明朗
Citation	ニダバ , 18 : 64 - 68
Issue Date	1989-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047202
Right	
Relation	



ポルトガル語におけるRaisingについて

坂 東 明 朗

1. はじめに

一般に、英語でRaisingと呼ばれている現象としては、埋め込み文 (embedded sentence) の主語が母型文 (matrix sentence) の主語に繰り上がっている型 (Subject-to-Subject Raising) が、認められている。しかし、上昇に関わる要素として、主語だけでなく目的語も考慮すると、Raisingには、さらに3つの型が存在すると予測されうる。すなわち、埋め込み文の主語から母型文の目的語への上昇 (Subject-to-Object Raising)、埋め込み文の目的語から母型文の主語への上昇 (Object-to-Subject Raising)、埋め込み文の目的語から母型文の目的語への上昇 (Object-to-Object Raising)、といった型である。これら3つの型は、普通、Raisingとは考えられていないのだが、(ただし、S→O Raisingについては一部の研究者の間で認められている)、実際には、そのようなタイプのRaisingを伴っているとみなしうる構文も存在するようである。

そこで今回は、上記の4つの型が考えられるRaisingについて、それをポルトガル語において考察してみたい。

2. Subject-to-Subject Raising

S→S Raisingを伴っている例文は、次のようなものである。

(1) Carlos parece ignorar Gabriela.

「カルロスは、ガブリエラを無視しているようだ」

(2) A minha irmã parece que tem um noivo.

「私の妹は、婚約者がいるようだ」

(3) As crianças é natural que durmam cedo.

「子どもというのは、早く寝るものである」

(4) Os soldados importa defenderem a pátria.

「兵士たちは、祖国を守ることが必要である」

上に挙げた例文は、それぞれ2つの文、すなわち母型文と埋め込み文から成っており、(1)を具体的に分析すると、Carlosはpareceを述語にもつ母型文の統語的主語であるとともに、埋め込み文のignora- Gabrielaに対する主語でもあり、同時に、Carlos ignora- Gabrielaという埋め込み文全体は母型文の論理的主語になっている。

このように、埋め込み文の主語が母型文の前に出され、残りの埋め込み文の構成素が母型文の後に置かれている構造は、英語にも見られ、それをすでにPoutsmaは“Shifting of Subject”、Jespersenは“Split Subject”と呼んでいる。しかし、(2)、(3)のように、埋め込み文が定形節のままで主語が母型文へ繰り上がっている構文、及び、(3)、(4)のように、埋め込み文から上昇した主語に対して母型文の動詞は人称・数の一致をせず、埋め込み文の動詞が人称・数の一致を続けている構文は、ポルトガル語に特徴的なもので、英語には存在しない。

3. Subject-to-Object Raising

以前の変形文法において、S → O Raisingとして知られていたものは、英語の場合、主動詞believeなどが名詞句+to不定詞を目的語として伴う構文である。ところが、これに相当するようなポルトガル語の構文は非文とされる。

(5) *Creio João ser inteligente.

「私は、ジョアウンは頭がよいと思う」

つまり、母型文の主語と埋め込み文の主語が異なる場合、埋め込み文において、英語のように非定形動詞を用いることはできないのである。

しかしながら、次のような例では、S → O Raisingを伴っていると考えられる。

(6) Vi a menina cair.

「私は、少女が倒れるのを見た」

(7) Ela não os deixou nadar.

「彼女は、彼らを泳がせなかった」

これらの文は、一般には、S → O Raisingを伴っているとはみなされていないようである。しかし(6)の場合なら、まず、viという述語を持つ母型文の統語的な目的語 a meninaは、cai-という述語を持つ埋め込み文の主語であり、さらに、a menina cai-という埋め込み文全体が母型文の論理上の目的語になっている、と分析できる。

この型の構造を採りうるのは、主に例のような、いわゆる知覚・使役動詞を主動詞とする文である。この他、やや口語的だが、

(8) A mãe observa a criança se dorme.

「母は、子どもが眠っているかどうか見る」

のような例も見られる。(8)は、埋め込み文が定形節であってS → O Raisingを伴っているという構造を持っており、英語でこれに相当するような構文は存在しない。

4. Object-to-Subject Raising

O → S Raisingを伴っていると考えられる構文は、一般に変形の立場から *tough-Movement*と呼ばれている操作により派生される文、及び、受身（あるいはそれに準ずる）文である。

(9) O português é difícil de aprender.

「ポルトガル語は習得するのが難しい」

(10) Este livro foi escrito por um jornalista.

「この本は、ある新聞記者によって書かれた」

上に挙げた構文については、これまでも、言語学的にさまざまな角度から注目されてきたと思われる。しかし、われわれの視点から(9)を例にとって分析すると、o portuguêsはdifícilを述語に持つ母型文の統語的主語であり、かつ、埋め込み文においてaprende-の目的語となっており、また、(de) aprende- o portuguêsという埋め込み文全体が母型文の論理的主語となっている、と言える。

5. Object-to-Object Raising

O → O Raisingを伴っていると考えられる例文として、次のようなものが挙げられる。

(11) Ele tornou-se conhecido.

「彼は知られるようになった。」

(12) Os homens acham-se submetidos a um destino implacável.

「その人々は、無情の運命に従うことを自ら悟る」

(13) Maria se fez compreender.

「マリアは自分のことを理解させた」

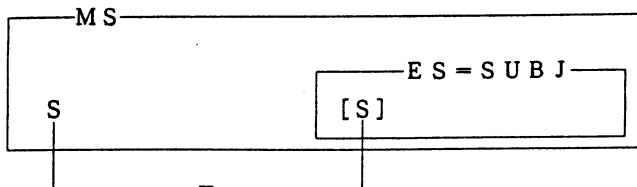
実際には、これらの文に、Raisingという現象が関わっているとして分析されることは、ほとんどないようである。しかし、(11)を例に分析してみると、seはtornouを述語に持つ母型文の統語的目的語であるとともに、埋め込み文の述語conheci-に対しても目的語となっており、同時に、conheci-seという埋め込み文全体は母型文の論理的目的語となっている。

この型の構文を採りうる主動詞の多くは、既述の $S \rightarrow O$ Raisingをも伴いうる使役・知覚動詞である。

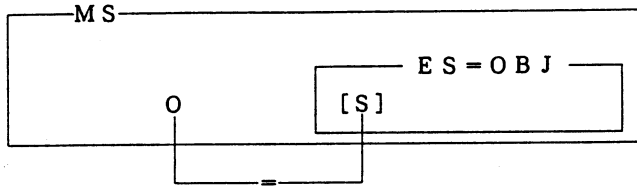
6. 結論にかえて

これまで見てきた4つの型のRaisingは、ポルトガル語における多くの言語学的に興味ある構造に関わっていたが、これを簡単に図示すると次のようになる。(MS = matrix sentence, ES = embedded sentence, subject = S U B J / S, object = O B J / O)

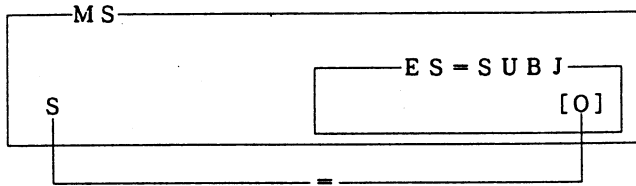
< I > Subject-to-Subject Raising



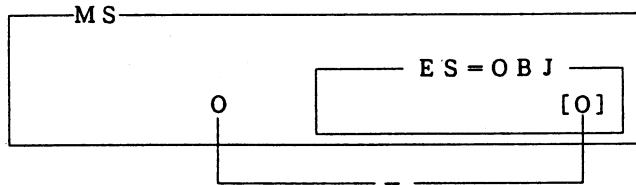
〈Ⅱ〉 Subject-to-Object Raising



〈Ⅲ〉 Object-to-Subject Raising



〈Ⅳ〉 Object-to-Object Raising



これらすべての型のRaisingに共通する特徴として挙げられるのは、埋め込み文の論理的機能 (SUBJ/OBJ) と母型文へ繰り上がっている要素の統語的機能 (S/O) が等しいという点であり、このため、一つの文に2つの主語あるいは2つの目的語が含まれているような構造になっている。

そして、また、Raisingを起こしている名詞(句)は、従属節と主節の両方に関わっているため、ある意味で節の境界をあいまい化している。この事実が、単文から複文へと派生されていく過程で、どのような関連を持っているのかということは、今後考察されるべき問題である。